

カントの前批判期における経験論的形而上学について

On the Empiricism Metaphysics in Kant's Previous Criticism Period

笠井 哲

福島工業高等専門学校一般教科

KASAI Akira

National Institute of Technology, Fukushima College, Department of General Education

(2021年8月20日受理)

The purpose of this paper is to consider the empiricism metaphysics in Kant's previous criticism period. Kant criticized formal logic. This is because he respected usefulness in the philosophy. About the metaphysics, Kant took the following viewpoint. He adopted the existential conflict in the logic. In this way, Kant established empiricism metaphysics.

Key words: Kant, empiricism metaphysics, previous criticism period, formal logic, existential conflict

1. はじめに

本稿の目的は、カントの前批判期における経験論的形而上学について考察することである。前批判期においてカントは、まず1759年に『オブティミズム試論』を公表した。それ以来、『フンク君の早世を悼んで』という短い追悼文を除き、三年間沈黙してしまった。しかし、この三年間は、彼の生涯に何度か訪れた転機の最初の空白であり、その沈黙も新たな思想のいわば発酵期であった。

実際、1762年から1764年にかけて、それまでの思考のスタイルとは打って変わった論文が、相次いで発表された。そして、このような思考方法の変貌は、通常「独断的合理主義から経験論的懐疑主義へ」と位置づけられる転回である。それは、次に引用する『1765-66年冬学期講義計画公告』（以下『公告』と略す）の末尾の文章における「変更」の意味に他ならない。

「以上は、いま始まった半年間の学期に、私が大学で教える主題の簡単な予告である。いま、少し変更するのがよいと考えている教授法につき、多少なりとも人の理解を得ることだけに、この予告が必要と考えた。私のやり方はこのようなものである」¹⁾。

したがってこの『公告』は、1750年代の終わりから1760年代の前半にかけて、彼自身の思想的遍歴とその帰結を、改めて自己確認したものである。しかし、その遍歴の筋道となるとそれほど単純ではない。確かにいたるところで、「経験」を主導指標として、思索が進められてはい。しかし他方で、ヒューム(1711~1776)流の形而上

学解体に、同意しかねてもいる。

この動揺は、1766年の『視霊者の夢』で極限状態に達し、後の「批判哲学」の母胎となった。本稿においてわれわれが追跡したいのは、次のことである。1760年代前半の動揺している状態において、カントが経験論的形而上学を確立する中で、如何なる思索を営み、かつ如何なる課題を自らに課すことで、批判哲学形成のためのモチーフを手探りしていたかである。

そうすることで、われわれは以後のカントの哲学的思索の中核に位置するものを、浮き彫りにできるのではと期待している。そこでまず、この転回にあたって彼が直面していた問題を、述べておきたい。

ライプニッツ(1646~1716)自身はどうであれ、彼の哲学をドイツに広めたヴォルフ(1679~1754)は、ライプニッツの内属論理を徹底させ、ついには矛盾律を最高位に置く存在論を築き上げた。思惟の原理と存在の原理は、重なり合うというこのヴォルフの思想を、1750年代のカントは、すでにその解体に着手していた、といっ

てよいだろう。1755年の『形而上学的認識の第一原理についての新しい解明』（以下『新解明』と略す）は、認識根拠と存在根拠の区別に基づき、「一切の真理の上に立つ矛盾律の最高不可避の地位について、正しくというよりむしろ信頼の念でもって一般に述べ立てられていることを、より子細に検討する」²⁾ というものである。

翻って今度は逆に、矛盾律に解消されかねなかった根

拠律を、独自の原理として「改善」することをその目的としていたのである。

もっとも、解体しつつあった本体論主義の亀裂を回避する手立てが、残されていないわけではなかった。「神の知性の図式」に基づいた、予定調和説の修正版ともいえるべき「普遍的調和」理論の位相のもとで、存在と思惟とは、少なくとも神の知性においては、そしてその知性に与りうる人間においても、再び融合しうる、とカントは考えていたのである。

しかしながら、いったん生じた亀裂は、神の知性をもってしても再び塞がることはなかった。存在と思惟の究極的な結節点としての神の存在が、おぼろになったからというばかりではない。神の知性によって、かろうじて支えられていた理性の体系は、ヒュームの因果律批判に遭遇して決定的に崩壊したのである。

因果律は、主観的な妥当性を持つに過ぎないというヒュームの理論は、カントにとって、合理主義の要たる存在と思惟の結び目を、一挙に断ち切るものに他ならなかった。思惟、ことに論理的思惟が、存在把握にまったく無力だということを、カントに徹底的に教えてくれたのがヒュームであったのである。

おそらく、1750年代の終わりから1760年代の初めにかけて、カントはこの本体論主義の解体を深刻に受けとめたものと思われる。1762年以降に公表された論文は、いずれも、こうした解体過程で営まれた思索の産物なのである。こうした問題状況を念頭に置きながら、1760年代前半の論文のうち、以下の三篇を考察の主な対象とした。

それは、1762年の『三段論法の四格の誤った煩瑣さ』（以下『三段論法』と略す）、1763年の『負量の概念を哲学に導入する試み』（以下『負量の概念』と略す）、1763年の『神の現実存在の論証のための唯一可能な証明根拠』（以下『証明根拠』と略す）である。

2. 形式論理学への批判

カントは、『三段論法』を、1762年—63年冬学期の論理学講義の公告として書いたのであった。まず、その趣旨を紹介しておきたい。カントによれば、理性推理はすべて、純粹理性推理と混成理性推理に分けることができる。前者は、大前提、小前提、結論の三つの判断のみからなるものである。後者は、それ以上の判断を含むものである。

ところで、第二格から第四格までの推理は、見かけ上は、確かに三つの判断からなっている。しかし、「ここ

で肝心なのは、人が何を言っているかではなく、そもそも適切な推理が存在するためには、考えることに何が不可欠か、ということなのである」³⁾。これは、やはり混成理性推理なのである。たとえば第二格を取り上げてみれば、そこでの大前提は直接推理によって換位されて、はじめて小前提につながる。だから、第二格は実際には四つの判断からなる。これと同じ議論をカントは第三格、第四格にもほどこす。

結局、「いわゆる第一格では、純粹理性推理だけが可能であり、他の三つの格では、混成理性推理のみが可能である」⁴⁾という。さらにカントは、これに続けて「三段論法を論理的に区分けして、四格をいうのは誤った煩瑣さである」⁵⁾と主張するのである。

この主張を理解するためには、論理学に対するカントの基本姿勢を説明しておく必要がある。彼によれば、「論理学の目的はもつれさせることではなく、解きほぐすことにある。覆い隠すことでなく、明るみに出すことにある」⁶⁾という。

こうした公準に照らしてみれば、論理学における推理は、いずれも「単純、入れ込みなし、隠された付加的推理抜きでなくてはならない」⁷⁾のは当然であろう。このように論理学が「すべてを最も単純な理解の形に持っていくという本来の目的」⁸⁾としている限りで、第二格から第四格を純粹理性と見立てて、その各々に煩瑣な規則を設けるのは、不必要であるどころか誤りですらある、というのである。

このようなカントの提案は結局のところ、第二格から第四格までの間接推理のそれよりも、はるかに単純であるという保証がなければ、その提案は無意味であろう。また、たとえその保証があったとしても、それは程度問題に過ぎない。いずれにせよ、カントの主張はそれだけを取り上げてみれば、論理学内部でそれほど大きな意味を持つものではないといえる。

われわれはむしろ、カントが次のように主張するようになったのは何故かを問題にしたい。「論理学の目的は、もつれさせることではなく解きほぐすこと」、「すべてを最も単純な理解の形に持っていく」ことにあると。この点を考えてみれば、『三段論法』における彼の論理学批判の視点が、いっそう明確になると考えるからである。

「知っていなければならないことが、山積みこの頃である。まもなく、その中の最も有用なものを理解するだけでも、私たちの能力は不足し寿命は短すぎる日がやってくる。豊かな富が目前にある。それを手に入れるには、役に立たないがらくたを諦めねばならない。大体、

初めからそんなものにかかざらわれない方がよかった。このわずか数時間の仕事で、頭を古式の紫雲に隠した土くれ足の巨人を、蹴倒せるなどとうぬぼれてはいない。ただ、論理学の講義では何もかも私の考えるところに従って、組み立てることはできない。幅を利かす好みにも、十分に合わせなければならぬので、今まで述べてきたようなことはざっとすませ、その分の時間を、有用な知識を確実に拵げることに使いたいのである」⁹⁾。

この引用でも使われ、そして『三段論法』の後半部分でしきりに登場する「有用」というのは、ここでの論理学批判の視座である。近代初頭にベーコン(1561~1626)が、アリストテレスの三段論法に「新しい道具」(『新機関』)を対置した。あるいは、デカルト(1596~1650)が「学院で教えられる思弁哲学」に代えて「実際の哲学」を提唱しつつ、スコラ哲学の形式主義の不毛さを攻撃したとき、彼らを導いたのと似たモチーフが、この時期のカントにも見られる。

ではカントにとって、有用な知識ないしは知るに値することがらとは、如何なるものであったのだろうか。カントはこの当時から、大学での講義の構成を大幅に変更する必要を感じていた。それを公に表明したのが、本稿の冒頭で触れた『公告』である。その中で、彼は次のように述べている。

「人の認識は本来、こう歩む。まず悟性が形成されるが、これは、悟性が直観的に判断をして、この判断を通じて概念を得ることによる。この上で、このような概念は、理性を通じて原因と結果の関係のなかで見られ、最後に学問によって、秩序ある全体のうちで見取られるようになる」¹⁰⁾。

また、カントは次のようにもいっている。

「したがって、指導のあり方はこうなる。まず、悟性を成熟させ、その成長を早めることが第一である。これには、悟性を経験について判断させることで鍛え、悟性の注意を感官がもたらす感覚の比較によって、学び取られるようにさせることである。悟性は、この判断や概念から、より高度のもの、つまり経験から遠い判断や概念へ、思い切って跳躍しようなどとしてはならない。そこへは、地に足のついた概念を辿る自然で踏みならされた小径が続いている。このような概念が悟性を少しずつ前へ進めていくのである」¹¹⁾。

経験から始めて、順次により高次の抽象的段階へ進む、というこの方法にしたがって、カントは次のようにいう。たとえば倫理学においては、「生じなければならないことを示す前に、現に生じていることを経験的、哲学的に

検討する。こうすることによって、人間の研究が従うべき方法を、明らかにするのであるとされる」¹²⁾のである。

さらに彼は、形而上学講義を次のように編成した。すなわち、テキストとして採用した、バウムガルテン(1714~1762)の『形而上学』における存在論—宇宙論—経験的心理学—理性的心理学—自然神学、という順序を組み替え、経験的心理学と経験的宇宙論を冒頭に据え、次に存在論と理性的心理学を、そして最後に理性的宇宙論を置いたのである。

こうした組み替えはもちろん、経験から始めよ、という先の要請に由来する。それに続けてカントは、そこには実は「偶然の産物なのだが、だからといって侮ることはできない」ような「もう一つの利点」¹³⁾があるという。

「ご承知の通り、大学の始まりは快活で落ち着かない学生の熱気で包まれているものの、講義室は次第に空席が目立つようになる。どう注意しようが、この起こってはならないことは将来いつも起こると思う。しかし、今やってきた教授法は、それなりに役立つ。学生の熱心さは、経験的心理学の終わりくらいで消え失せているかも知れないが、それでも学生は、容易だから理解できて、興味から楽しめて、そして生活の中で役に立つものを吸収しているはずなのである」¹⁴⁾。

それゆえカントの考えていた有用性とは、ベーコンやデカルトの場合のような、自然支配にとつてのそれといった遠大なものではなく、むしろ「学校向けではないにせよ、人生に向けて前より練れて聡明になっている」¹⁵⁾有用性という、ごくつましいものに過ぎなかった。

とはいえこのつましい「有用性」の視座は、同時に形式論理学への批判、さらにそれにはとどまらず、形式論理学に代表される、既製のアカデミズムの講壇哲学への鋭い批判の拠点にもなっていた。

本体論主義の解体に遭遇し、さらにヒュームによって、論理的思惟の無力さを、徹底的に思い知らされたカントは、既製の学問一般の背後に、確かな手ごたえを与えてくれる、世間およびその中における人間の生活を発見したのである。

ここには、フッサール(1859~1939)が数学的自然科学という「理念の衣」の蔭に、根源的な生活世界を発見したのを思わせるところがある。ただしフッサールの場合、自然科学的態度の妥当性は否定されたのではなく、ただ括弧に入れられただけなのであった。

しかしカントにとって、三段論法の格の規則などは、それこそがらくたに過ぎなかった。それに比べれば、確かに「学校向け」に貢献することなどほとんど期待でき

そうにもない。

しかし、「人生に向けて」世間の中で、立派に通用する知識の方が、はるかに信頼の置けるものとカントには映ったのである。彼がこの当時は、書名も含め、哲学について、Philosophie よりもむしろ Weltweisheit という言葉を多用したのも、こうした事情によるのであろう。

さらにこの時期には、七年戦争によるロシア軍の進駐という外的事情があったといえる。それにしても、彼の生活に社交のこと、そのうち大学外の実業人、イギリス人のグリーンなどとの交際が、見られることなど生活の片隅におけるエピソードも、今述べたことと無関係ではないのであろう。

こうした実用性に根ざした知識という視点が、1760年代前半において、かなりの重みを持っていたことを確認させてくれる事実がある。それは、世間知を目的とした二つの通俗講義、すなわち自然地理学と人間学の講義が、この時期に大学当局からの強制なしに、任意に始められていたということである¹⁶⁾。

自然地理学の講義については、1750年代の彼の自然研究への情熱に促され、早くも1757年に第一回の講義公告が出されている。

他方、人間学とはいえば、正式の講義として登録されたのは1770年代に入ってからのものである。しかし実質的にはこれもすでに1760年代の前半に、おそらくは、形而上学講義の経験的心理学の部分で講義されていた、と推定できる。

この推定の根拠の一つは、1798年に出版された『実用的見地における人間学』（以下『人間学』と略す）における「私は三十年余りにわたって、世間知を目的とした二つの講義を行ってきた」¹⁷⁾というカント自身の証言である。ただし、自然地理学講義は、実際には四十年以上にわたっている。したがって、この「三十年余り」という数字は、確実なものといえないかもしれない。

しかし『人間学』の内容を考え合わせてみると、この推定は、決定的な確証を得るのではないかと思われる。『美と崇高の感情に関する考察』（以下『美と崇高』）と『あまたの病気についての試論』（『脳病試論』）はともに、1764年に公刊されたが、これらは『人間学』のいくつかの部分に、対応しているのである。

『美と崇高』については、『人間学』の第9～第93節の「気質について」、第101～第104説の「両性の性格」、「民族の性格」である。そして『脳病試論』については、第45～第53説の「認識能力に関する心の弱さと病について」である。時には同じエピソードを混じえながら、個々

のテーマが敷衍もしくは要約されているのは、一目瞭然である。『人間学』のタイトルが「実用的見地における」という添え書きを持っていたのも、決して偶然ではなかったのである。

もちろん、こうした実用的見地が、カントの生涯にわたって維持されたわけではない。後の批判期においては、実用性は、純粹実践理性のもとで「道徳的一実践的」なものに沈み込んでしまい、彼のいわば公式の体系の中では、きわめて付随的な位置を占めるに過ぎなくなる。

「有用」ということの意味は、人間が人間の行為に関して成り立つとすれば、その行為の人間性に対する省察が乏しかったがゆえに、すなわち人間の行為における道徳性と技術性とが、ない交ぜにされていたがゆえに、この実用的見地は、道徳性の純化の過程で締め出されたのである。

しかし他方、少なくとも1760年代前半においては、実用的見地は、確かに論理学批判という消極的役割においてではあった。しかし世間とそこにおける人間の生活に、確かな手ごたえを覚えていたカントにとって、道徳性と技術性とをともに包括するより積極的な、ないしは生き生きとした地盤として、機能していたのである。

さて、これまで述べて来た有用性からする論理学批判が、外部からの攻撃であるとすれば、次に取り上げる『負量の概念』は、形式論理学そのもののいわば内部からの解体をねらいとしたものに他ならない。

そしてこの著作では、この消極的側面と同時に、新たな課題の設定という積極的側面も見られる。この課題の解決は、『純粹理性批判』に至る道の一つであった。そこで、次にその解体の次第について追跡してみよう。

3. 実在的対立の概念

『負量の概念』は、正量と負量との関係をモデルにしてつくられた「実在的対立」という概念の説明が、次のように始められている。

「一方が他方の定立したものを打ち消すとき、二つのものは互いに対立しているという。この対立には二つの意味がある。矛盾による論理的な対立か、実在的、つまり矛盾なしの対立かである。

第一の反対、つまり論理的反対は、今までそれだけに視線が集中していたものである。この反対では、同一のものについて、あることが同時に肯定され否定される。この論理的結合の結果は、矛盾律のいうように、まったくの無である。運動中野物体は何かであり、運動していない物体も何かである。しかし、運動の語の意味が同じ

である限り、運動中であって同時に運動中でない物体は、まったくの無である。

第二の反対、つまり実在的反対は、一つのものに付く二つの述語が対立しているが、矛盾律によってではない。ここでも、一方が他の定立したものを打ち消している。しかし、その結果は何かである。一つの物体のある方向へ向かう運動力と、この同じ物体の同じ大きさで反対方向へ向かう力は、矛盾するものではなく、一つの物の述語として同時に可能である。その結果は静止であり、これは何か（表象できる）である。これも真正正銘の対立である¹⁸⁾。

この二種類の対立の区別が、『新解明』における「認識根拠」と「存在根拠」の変型であることは、容易に見てとれよう。しかし、形而上学のレベルでなされた『新解明』における論理学批判は不発に終わった。それに対して、『負量概念』におけるそれは経験論的立場から、はるかに徹底的に遂行された。

二種類の対立を区別する¹⁹⁾というのは、とりもなおさず形式論理学において、すべての真理に対して持つといわれる、最高で疑いえない優位性を制限することを意味する。なぜなら、少なくとも実在的対立は、矛盾律によって理解できないからである。

そうだとすれば、この実在的対立の方こそ、実は世界の至るところに見られるものである。換言すれば、実在的対立こそが、存在の具体相であることを証明できれば、その証明が、即座に形式論理学の無力の証明ともなるはずである。

そこでカントは、物的な世界と精神的な世界の双方を、実在的対立の概念によって説明しようとする。第二章「哲学で負量概念が現れている例」²⁰⁾が、その作業に充てられている。そこでは経験を手がかりにしながら、物的な世界に関しては、引力と斥力の対立にはじまって熱と冷との対立、磁気や電気の両極の対立等の現象を挙げる。

さらに精神的世界については、快と不快、嫌悪と熱望、愛と憎しみ、美しさと醜さといった心理的現象と、徳と悪徳、善と悪等の道徳的事象を挙げて説明につとめている²¹⁾。この部分は、本稿の課題ではないので、詳しく紹介する必要はないであろう。またカント自身は、そうではないと強調しているにもかかわらず、いささか駄洒落の観を呈しているのは、否定できないといえる。

いずれにせよ、カントはこのようにして、実在的対立に満ちた世界こそが、現実の世界であると結論する。翻って矛盾律を、論理的思惟の領野に局限することにより、

形式論理学批判を、つまりは存在論批判を完結させたのである。

こうした実在的対立の概念のうちに、弁証法の萌芽を見てとろうとするのは、不可能とはいわないまでも早計というものであろう。カントの狙いは、また別のところにあつたからである。

「全体、こういった言葉づかいは、いつも、あるものどうしの相互関係を言うのであり、この関係なしでは負の概念は存在しなくなる。何かの性質を持ったものを一つ考えて、これを負のものと呼ぶことは、理に適っていない。数学者の負量という表現さえ、満足のいくほど正確ではない。負のものという大体、否定を意味してしまうが、これはここで明確にしようとしている概念では毛頭ない。すでに対立関係を明らかにしておいたが、むしろこれで十分なのである。負の概念は全体、この対立関係で尽くされるのであり、この関係はというと、これは実在的対立に他ならない。さて、対立関係にある一方は、もう片方と矛盾するような反対のものではない。この片方が何か積極的なものであれば、一方はこれの単なる否定ではなくて、後で直に見るように、何か積極的なものとして片方と対峙しているのである。こういったことを端的に表現したい。そこで、数学者のやり方にならって、下降を負の登り落下を負の上昇、退却を負の前進と呼ぼう。こうすれば、たとえば落下は上昇から、非 a が a から区別されるように、そのまま区別されるのではなくて上昇と同じく積極的なものであり、上昇と一緒に初めて初めて否定の根拠を含むことが、表現からすぐにわかるのである」²²⁾。

負量は積極的だという、一見逆説的なカントの主張を支えているのは、実在的対立における負の概念の特殊性である。そしてこの特殊性が、論理的否定との対照で説明されている。論理学における *negativ* とは、否定的判断における *nicht* が表現するもので、一般に非 a で表される。しかしこの非 a は、 a でないということを示すだけで、肯定的に何ものかを指示するわけではない。ゆえにそれは、単なる欠如ないしは不在であって、純粹に否定的としかいいようのないものに過ぎない。

ところが、実在的対立における *negativ* なものは、他のものと積極的に対立する。それゆえ負の符号をつけられた側は、正の符号をつけられた側と、ただ符号のつけ方が反対だけで、符号を取り除けば双方とも積極的な何ものかである。非 a が単に a でないということを示すだけで、無限の非 a の可能性を許す。

これに対して、実在的対立における負の側は、おのれ

の対立物に対して、おのれを特定のものとして定立する。結局、正と負の符号のつけ方が任意なので、実在的対立の両項を実在的根拠と呼ぶことになる。

ところで、実在的対立からは何ものかが生じた。これは、実在的対立から何ものかが帰結した、というに等しい。してみれば、実在的対立という概念において真に見届けられねばならないのは、実在的根拠とその帰結の関係、すなわち因果性関係なのである。つまり、実在的対立の概念設定は、矛盾律では把握できない因果関係を、露呈させるための「ささやかな始まり」²³⁾であったのである。

繰り返す述べれば、『負量の概念』においてカントが目論んでいたのは、存在の世界を矛盾律では律し切れない因果性世界として提示することで、形式的論理学を解体する。一方で、この因果性の基礎づけを、真の課題としてはっきり確認することであった。「何かがあるので別の何かがある、これをどう理解したらよいのか」²⁴⁾。本体論主義への逆戻りは、もちろん許されるものではない。しかし他方、ヒュームの因果律批判を十分に承知しつつも、なおかつ心理学的解釈に陥らない方向で、この間に答える。それが、超越論的哲学の地平の開拓へとカントを導いたのである。

4. 理性的神学への批判

これまで、実在的対立に注意しつつ、カントの形式論理学に対する批判を見てきた。ところで、この形式論理学批判は、合理主義的形而上学の頂点たる理性的神学への批判とも連動するものであった。

特に問題が集中したのは、神の存在証明であり、『証明根拠』はひとえに、この問題の考察に捧げられている。この著作では、伝統的証明方法の破壊が、後年の『純粹理性批判』においてそのまま受け継がれるほど、徹底的に成し遂げられている。

すなわち、存在論的証明は、現実存在と本質存在の区別により、宇宙論的証明は推論の不確かさをもって、最後に自然神学的証明は、後に述べる理由で拒否されている。あるいは、存在概念の経験論的把握が試みられている。

このように、検討すべき側面は多いのであるが、ここではこの著作に見られる、奇妙な齟齬を浮き彫りにしてみたい。実は、こうすることで、これまで素描したカントの姿を、別の角度から改めて確認できると考えるからである。検討の中心となるのは、第一部第二考察と第二部である。

第一部第二考察は、「現存在を前提としている限りでの内的可能性について」²⁵⁾と題され、四節に分けられている。そしてここに、カントが提出しようとする「唯一可能な証明根拠」が述べられている。そこでまず、彼の証明根拠を、逐一辿ってみることにしたい。

第一節に、「可能性の概念にとって必要な区別」²⁶⁾という表題がつけられている。この区別は、『新解明』におけるそれを、そのまま踏襲したものともみることができる。「どのような可能性においても、次の二つをはっきり区別しなければならない。すなわち、ある何らかのものが思考されているということと、思考されたものと、この思考されたものの中に含まれている、もう一つの思考されたものが、矛盾律に従って一致しているということ、以上の二つを決して混同してはならない」²⁷⁾。つまり、可能性とは、その要素が矛盾していないという形式的条件と、そのような無矛盾の関係に置かれる要素、データすなわち素材という実質的条件とからなる、というのである。

この区別に基づいて第二節は、「如何なる物の内的可能性も何らかの現存在を前提とする」²⁸⁾ことを証明する。これは第一節の主張の裏面であり、可能性が成立するためには無矛盾性の他に、無矛盾の関係を取り結ぶ「素材」が存在せねばならないというのである。

ところで、「すべての現存在が廃棄されるならば、絶対的に何も存在せず、そもそもどのようなものも与えられておらず、何らかの思考可能なものに対する実質面もなく、すべての可能性は消滅する。なぜならば矛盾が形成されるためには、あるものが指定されかつ同時に廃棄されることが必須であるが、この場合、そもそも何も指定されていないのであるから、この廃棄が内的矛盾を含んでいるとは、いうことができないからである。だが、何らかの可能性が存在して、しかも、何らの現実性も存在しないということは、自己矛盾である」²⁹⁾。つまり現存在はいつも、「内的可能性」の成立のためには、という条件付きで主張されるのである。してみれば、この条件すなわち内的可能性の成立について、議論せねばならない。しかしこれは出発点に逆戻りすることになる。

カントは、議論の方向を変えて、第三節では「何ものも存在しないことは絶対的に不可能である」³⁰⁾という命題を掲げる。すなわち彼は、如何なる現実存在をも主張できなくしてしまう唯一の根拠、つまり「何ものも存在しない」という命題を否定しようというのである。彼はまず「それによってあらゆる可能性が、おしなべて廃棄されるようなものは、絶対的に不可能である」³¹⁾という

命題を立てる。これに続けて、先の可能性の形式的条件と実質的条件の区別に依拠しながら、自己矛盾するものは不可能だという。

次に、確かにあらゆる現存在の廃棄そのものに内的矛盾はない。しかし、それがあらゆる可能性を廃棄する限りにおいて絶対的に不可能だ、というのである。如何にもスコラ的な論証で、その真意はつかみにくい。それに、果たしてこれが、論証になっているのかどうか判然としないのだが、おそらく次のようなことであろう。あらゆる現存在の廃棄は、内的矛盾を含まないから、その限りにおいては形式的条件を満たして可能である。

してみれば、その不可能性は、実質的条件の側に求められねばならない。しかし、実質的条件たる「データないし素材」が、そもそもそれ自身によって廃棄されている。ゆえに、あらゆる現存在の廃棄は不可能だ、というわけであろう。

この第三節までで、カントの「証明根拠」は、ほぼ提出されていたと見てよい。続く第四節は、可能性を矛盾律だけで説明するのは誤りで、結局は何らかの現存在に訴える必要があることを示すものであり、第二考察全体への付論となっている。

そして、第三考察および第四考察は、この現存在が「絶対的に必然」、「一」、「単純」、「不変かつ永遠」で「最高の実在性」を持ち、かつ「悟性と意志」を持った「精神」であること、すなわち神であることを証明するために費やされている。では、その「証明根拠」について、少し検討をしておこう。

5. おわりにかえて

すでに述べたように、『証明根拠』第二考察の第三節については、判断を保留せざるをえない。しかし、たとえその論証が成立したとしても、カントの証明全体は失敗といわねばならない。なぜなら、証明全体の要となっている第二節の議論は、『新解明』でのそれとまったく同じだからある。

したがって『証明根拠』は、『新解明』に見られた難点を、そのまま再現している。第二節の核心は、「論理的な不可能性としての内的矛盾が、存在するときだけでなく、思考さるべきデータすなわち素材が存在しないときも、可能性は消滅することが、明らかであろう」³²⁾という命題にある。

この命題に依拠してはじめて「データすなわち素材」は、ただ思考の中で定立され、思考に与えられるだけで一向に差支えないはずである。その場合にも、思考する

ための素材は、確かに存在するからである。しかし、そのように存在するのは、思考上の存在者すなわち「思惟物」でしかありえない。そうだとすれば、神の存在もまた、思考上の存在でしかなくなる。

他方この困難を避けようとするれば、今度はデータすなわち素材の「現存在」の意味を、限定する他ないであろう。つまり、与えられると定立されるということ、経験に与えられ経験の中で定立される、と解釈するのである。

実際カントは、第一部第一考察で現存在の意味を、次のように限定しようとしていた。

「例えば、海に棲息する一角獣には、実在という述語が帰属するが、陸に棲息する一角獣には帰属しない。これの意味は単に、海棲一角獣の表象は経験概念であるということ、つまり、実在するものの表象であるということに他ならない。だから、そのような存在の現存在を主張する、すなわちこの命題の正しさを証明しようとするならば、可能性の述語だけしか見つからない主語概念の内部ではなく、それについて私が持つ認識の源泉の内部を捜すのである。私はそれを見たとか、それを見た人から聞いた、というのである」³³⁾。

しかし、こうした限定を加えれば、神の存在が一向に証明されないのはいうまでもない。神は、原理的に証明不可能だからである。要するに、カントの「証明根拠」は、ひとえに「現存在」の意味、「与えられる」とか「定立される」の意味の二義性に依存しており、それゆえ失敗なのである。すなわち、その意味を経験の範囲内に限定すれば、神の存在が排除され、他方その限定を解除すれば、今度は、神は思惟物になりかねない、ということである。

このディレンマは結局のところ、おそらくは可能性概念の未分化にある。カント自身が、『負量の概念』において、「論理的なもの」と「実在的なもの」の区別を立てていた。それにもかかわらず、この『証明根拠』では、思惟においてのみ成立する論理的可能性と、経験の脈絡の中で成立する実在的可能性という、可能性の様態の根本的な区別を見逃している。

しかし、重要なことは、こうしたカントの失敗をあげつらうことではない。むしろ、カントがこの落とし穴にはまったのは何故かを考えてみるの方が、有益であると思われる。そうすることにより、『三段論法』の言葉を借りれば、「人が何を言っているかではなく、そもそも適切な推理が存在するためには、考えることに何が不可欠かということなのである」³⁴⁾といえよう。

以上のように、カントは形式的論理学を批判し、有用性を重視した。その際、論理的対立ではなく実在的対立を採用する。このようにして、経験論的形而上学を確立したのであった。ただし、神の存在の証明根拠について、本稿の考察では不十分であったので、この点については別稿に譲ることにしたい。

参考文献

- 1) カントからの引用は、アカデミー版による。慣例に倣い、ローマ数字で関数を、アラビア数字で頁数を記す。Ⅱ. 313
- 2) Ⅰ. 387
- 3) Ⅱ. 50
- 4) Ⅱ. 51
- 5) Ⅱ. 55
- 6) Ⅱ. 56
- 7) ebenda
- 8) ebenda
- 9) Ⅱ. 57
- 10) Ⅱ. 305
- 11) Ⅱ. 306
- 12) Ⅱ. 311
- 13) Ⅱ. 309
- 14) Ⅱ. 309-310
- 15) Ⅱ. 306
- 16) Vgl. Ⅶ. 122. Anm.
- 17) Ⅶ. 122. Anm.
- 18) Ⅱ. 171
- 19) 高橋昭二は、この区別について、次のように述べている。

「この区別の確立は哲学に多くの収穫をもたらすであろう」。

高橋昭二：カント批判期前の哲学，p. 125，カントの弁証論 所収（創文社、1969）

また、檜垣良成は、カントにおける「対立」の問題に着目して、前批判期からさらに『純粹理性批判』の成立についても理解することを試みている。

檜垣良成；カント理論哲学の研究 — 「実在性」概念を中心として 一，pp. 168—181（溪水社，1998）
- 20) Ⅱ. 179
- 21) 川島秀一は、「後の批判倫理学に通底する一貫した心術倫理の思想と解されてよいであろう」と述べているが、本稿の課題から外れるので別の機会に考えてみたい。

川島秀一；カント批判倫理学 — その発展史的・体系的 研究 一，p. 139（晃洋書房，1988）
- 22) Ⅱ. 175
- 23) Ⅱ. 169
- 24) Ⅱ. 202
- 25) Ⅱ. 77
- 26) ebenda
- 27) ebenda
- 28) Ⅱ. 78
- 29) ebenda
- 30) Ⅱ. 79
- 31) ebenda
- 32) Ⅱ. 78
- 33) Ⅱ. 72—73
- 34) Ⅱ. 50